

第二期 第三十二号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2019.03.20 定有堂書店 発行

探求のかたち

本屋の系譜

『ただいま』『顕れ』

「家について行ってイイですか」事件

それな

環ヤポネシア 香港編②

サクラサクラ、ヤヨイノソラウ

2月の日記

高校新聞

土筆

インドからの二人

鳥取あれこれ その三十一

虚像ばかりのドレブュシー

は(ち)く

飛ぶはなし

…… 編集後記

奈良 敏行

鳥居 貴彦

五島 朋子

萩原 俊郎

ワクサカソウヘイ

芝野 浩貴

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

戸國 航

五百川知子

山本千津子

内田 克彦

秦草 梅林

あきの素生

ドラメリア



探求のかたち

奈良 敏行

(定有堂 店主)

この二月も一期一会の出合いが多かった。それが誰だったかはもう覚えていないが、お茶をしながらふと距離感が近づいた瞬間に発した問いだった。「百尺竿頭に一步を進む」という一語が気になるけど、この先どうします？と試みに尋ねたのだった。きちんと言ったわけでもなかった。解答は聞きそびれてしまった。

探求のはじまりはこの「先端に漂う」ような風景だ。ときに店頭と竿頭が混濁するのもおかしい。先日も県中部から時折お見えになる、国語教師のOさんに、平台のちくま現代文アンソロジー・シリーズに『科学評論選』が加わってるよ、と教わった。たしかにまとまった科学文集で刺激的だ。「AI」への理解が欠かせない時代が到来している。その中で「意識の不思議」に興味を持った。出典元の『脳の意識 機械の意識』中公新書もいき

おいで読破した。これはさいわい店頭にあった。

「日々、私たちは総天然色の視覚世界を体験するが…。色はあくまで脳が創りだしたにすぎず、外界の実体は電磁波の飛び交う味気ない世界だ」という一文にびっくりした。竿頭を一步踏み出せば「電界と磁界の波及する状態」だったのだろうか。

この竿頭と店頭はもちろんすべてではないが少し同期するようにも感じる。竿頭つながりでいえば、店内のあちこちに落とし穴のように点在するのが次の四作品だ。

今日も県外から来たという女性のお客さんに「どうして同じ本が数か所にあるの？」と問われた。「不思議だけど、いいですね」という感想だったので、とくに説明はしなかった。充分お互いの意は尽くせると感じたからだ。テッド・チャン『あなたの人生の物語』、ケン・リュウ『もののあわれ』『紙の動物園』（ハヤカワ文庫）、そして『マルチバース宇宙入門』（野村泰記・星海社新書）が、四、五か所に並べられている。ケン・リュウには「電脳化する人類」「人間が電脳空間にアップロードする」というモチーフがある。テッド・チャンの作品は非人類的言語者との遭遇もあり斬新だ。人類が考え得るオルタナティブの限りではあるが…。

見ているものと見えているものが同じではないという「かたち」に世界への入口の扉を感じる。簡単にいうと

それだけのことに興味があるということだが、「ここにこうしてある」一事が、いつも不思議だからだ。例えばケン・リュウの最新刊『生まれ変わり』（ハヤカワ・ポケミス）にも、「記憶を取り戻すために、あなたは一組の神経連絡を再活性化しなければならず、その過程で神経連絡を変化してしまう」と異星人が人間に指摘する。つまり「記憶」はすべてエラーなのだ。だからアイデンティティなんてなんの必要もないでしょうと、これはじつは洗脳への論理なのだ。

百尺竿頭で人に出会ったとき、ふとこんな話をしてみたくなる。いつか誰かが答えてくれるかもしれないからだ。「こころ明らむ」だけなのだけど…。

この月多く出合いを重ねたのだが、大阪から見えたばかりのKさんとは大事な交わりを得た。雑談の折に知ったのだがKさんは井筒俊彦全集を所蔵していることを大切にしている人だった。いろいろ教わるうちに、二十年前ぶりに『意識と本質』を読了できた。手元に残しておいてよかった。意識は言葉でかたち作られている。本質は言葉で定義されたもの。だから存在そのものに触れることができない。「本質」は虚構である。この了解から井筒俊彦は「本質」を階梯的に考究していくようだ。本質が定義であるならば、何度も定義し直さなければならぬ。「定義」の中に「世界」が存在しない、ということ

だろうか。「世界」がここに存在しないというのはマルチバースの考え方に似ている。泡のような境界面が、数えきれないほど同時に存在する。「世界」はいずれの泡の内部にも存在しない。外部を包むどこかにあるものだ。「本質」とマルチバースを重ねあわせて考えるのも変だが、『意識と本質』のテーマを「本質の彼方へ」とくくってしまつては理解が浅いだろうか。本質をこう定義している。「『本質とは存在の限定付け、すなわち存在の部分は、断片的。あるいは局所的限定を意味する』と。意識は言語に限定される。人の言語の特徴は「線状」で因果関係を生成する。テッド・チャンの宇宙人の言語はそうではない。一挙に示される図像的なものだった。途上だが、探求のかたちは、このような道筋にぼんやり浮かんでいる。

2019.02.24

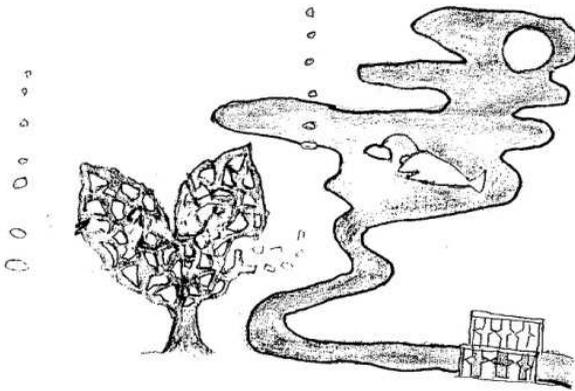
ちくま現代文アンソロジー『科学評論選』 筑摩書房

渡辺正峰 『脳の意識 機械の意識』 中公新書

ケン・リュウ 『生まれ変わり』 ハヤカワ・ポケミス

井筒俊彦 『意識と本質』 岩波文庫

野村泰記 『マルチバース宇宙入門』 星海社新書



本屋の系譜

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

「本屋の系譜」と石橋さんが言った。話の本筋ではないささいな話題だった。でもそれが妙に耳に残ったのは定有堂と長谷川書店の話だったから。そんなものが自分のなかにあるのか、確かめたいと思った。だから、鳥取に行こう、とおもった。その先には出雲がある。東城にもいけるかもしれない。なにかがまた動き出した。

起床。「え、8時だけど」と隣で言っている。ウソでしょ。3時間前に家出てるはずなんですけど。はしる。いやウソ、タクシー乗る。実家のクルマにたどり着いたのは9時。一時間後が待ち合わせ時間。ウソでしょ。けっきよく着いたのは十一時半だった。それでも定有堂は五年前のままだった。奈良さんも5年前のままの笑顔だった。「ランチになっちゃいましたねえ」と笑う。

「シヨキシヨウドウつてのを考えてるんですよ最近」といながら封筒の裏にボールペンを走らせる奈良さん。「こうやってね、文章には点が入るでしょ。これがA。で、Bはその文章が続いて、丸で終わる。わたしらなんかはBですわねえ」「あたらしく始める人らなんかはね、Aでずつと行くんです。で、点が付くのね」「シヨキシヨウドウでいけるのはいけるんですよ、点までは。でも丸までは見えてないかもしれない」。なんだろう、この話。黙って聞くことにした。で、ふと気づいた。「息継ぎですか」ときいてみる。「うーん」と曖昧な返事。違うのか。でも息継ぎでもいいんじゃないかな。

今度は物語のない本屋の話。取材はすべて断っていた。この店に物語はない。「天井からなんかぶら下げてごまかしてるんですよ」と笑う。それから本屋の裾野の話。表には出ない広がり。水鳥の足。

話を聞きながら物語の話と裾野の話が勝手に頭の中で混ざってゆく。物語はないんじゃない。ひとつではないんじゃないか。目に見えないところに根っこはたくさんあって、それが絡み合った上に定有堂は顔を出している。そこにわかりやすい物語なんてない。

油断していると急に球がこちらに来る。「で、メディアにはなんて答えるんですか聞かれたら」「ひとつはメディアに乗せてもらうことですねえ、で、ふたつめは？」。

たじろぐ。けつきよくまたなにも答えられない自分がいる。なにがしたいんだろう。なんの店なんだろう。奈良さんはどんどん前へ進む。置いていかれる自分。キューブリックの大井さんは開業前にこうして奈良さんと向き合ったという。なにを答えたんだろう。なにを話したんだろう。「本屋の系譜」という言葉が口から出た。そんなもの、いまの自分にはなんにも関係ない。逃げるな。封筒は不思議な図でいっぱいになった。

気づいたら16時だった。あああ。「出雲には5時間かかりますよ」と笑顔の奈良さん。なきそう。なきそうなまま松林さんに電話する。「あ、来てたんですね」と冷静。泊まるか、来年にするか、話しながらぐじゅぐじゅ迷う。「出雲大社に初詣いきましようよ」という声に救われる。ほんとうにすいません、と電話を切った。

東城までは2時間ちよい。まだいける。雨。ワイパーが水を切らない。めっちゃみにくい視界。それでも行く。はやく。

はじめてのウィー東城店は思った通りの店だった。こういう店が好きなんだ。笑顔の佐藤さん。「ご飯行きましようよ」と外に。中華料理屋でウィーのスタツフの方の話聞く。3年目。今年から正社員。「僕も次から4年目です。同期です」などと言ってみる。言ってからちよつと後悔する。ここでもまた「本屋の系譜」がでてきた。

「本流ですよこれが。僕なんか亜流の亜流だから」と佐藤さん。そんなことないんです。本流なんてほど遠いんです。申し訳ない気持ちになってくる。スタツフの方の目は輝いていた。気持ちのいい夜22時。「ここにも4時間いましたね」と笑いながら手を振る。

高速乗ってからガソリンがないことに気づく。どうにかかなりそうと計算するまでの記憶がない時速140キロ、という表示を見た気がするけど気のせいかもしれない。今日のことを考えるとオーバーヒートしそうになる。思考停止。ゆるゆる帰ろう。帰ってから考えよう。

(編集部注)

「開風社 待賢ブックセンター」

所在地… 〒602-8125

京都市上京区上る菱屋町818 大宮通 樅木町通

『ただいま』「ふく劇場」・『頭れゝ女神

「二二」の涙〜』SPAC

…二月の観劇

五島 朋子

(鳥取大学地域学部附属

芸術文化センター)

2月初旬、宮崎県の劇団こぶく劇場『ただいま』(永山智行作・演出)、静岡県舞台芸術センター(SPAC)『頭れゝ女神「二二」の涙〜』(レオノーラ・ミアノ作・宮城聰演出)の2本を続けて観劇する。かたや都城弁で語られる日常のホームドラマ、かたやアフリカの奴隷貿易を主題とするカメルーン出身フランス在住作家による神話世界。題材、時間軸、空間のどれを取っても遠く異なる作品だろうと思っていたが、見てみるとテーマや表現手法に大いに共通するところがあって驚いた。どちらにも、死者の魂の存在とその転生という死生観があり、

能や文楽といった日本の伝統的な舞台芸術を想起させるような表現方法を取っている。また、どちらの舞台でも、役者自身が劇中曲を演奏し、音楽がセリフと変わらぬ物語進行の役割を果たしていた。

『ただいま』では、宮崎のとある町に暮らす、市井の人々の穏やかな日常が丁寧に描かれていく。だが、舞台の作りはちよつと変わっていて、横に並んだ二つの小さな方形の舞台が、廊下のような通路で連結されている。役者は下手(客席から見て左側)から、すり足で、小枝を扇子のように胸の前に掲げ持って登場し、そのどちらかの舞台に乗って役に入る。役者は足袋をつけており、橋掛かりから演者が登場する能の舞台のようでもある。登場人物たちは、皆、白い服を着ているが、なぜか所々茶色に汚れている。東日本大震災や最近の豪雨災害が思い浮かぶ。ニーナ、と呼ばれる女性だけが、土色ではなく明るい緑色で汚れた衣装だ。どうやら、彼女は、登場人物の一人豆腐職人聡志の亡くなった妻の精らしい。役を降りた役者が、舞台後方でギターなど楽器を演奏し、物語に組み込まれた歌謡曲や洋楽を歌う。そもそも都城弁の抑揚がとても音楽的に響くのだが、歌詞も物語と絡み合い、ささやかな音楽劇となっている。セリフや役者が語るナレーションには、ところどころに様々な文学作品(例えば大岡昇平や宮本常一など)の文章が織り

込まれ、ありふれた日常とは、戦争や自然災害という悲劇をすり抜けてかろうじて成立している「奇跡」なのだと気づかされる。

一方の『頭れ』は、奴隷貿易に加担したアフリカ大陸の支配者たちを召喚し、万物創造の女神イニエが裁くという物語だ。16世紀から19世紀の間、ヨーロッパの国々は、アフリカに工業製品を運び、アフリカで黒人奴隷を積み込んで、新大陸（アメリカ）や西インド諸島のプランテーションに連れて行って働かせ、そこからヨーロッパに砂糖や綿花などの換金商品を運ぶ三角貿易で富を得た。生きて大西洋を渡った奴隷の数は一二〇〇万から二〇〇〇万人というが、過酷な航路で海の藻屑と消えた奴隷も多かった（当日配布の劇場パンフレット参照）。

『頭れ』に、生きた人間は登場しない。女神イニエ、自国の民を奴隷として売り払い「灰色の谷」閉じ込められたアフリカの大罪人たち、過酷な労働で命を落とし彷徨い続ける奴隷の魂たちウブントウ、魂の再生を助ける女神の使者たちマイブイエ。イニエは、奴隷貿易に加担したアフリカの罪人たちを召喚し、その罪を証言させることによって、彷徨える魂ウブントウを鎮めようとする。

舞台には、大きな丸い月と太陽が重なりあって吊り下げられているだけだ。照明効果によって、この世ではな

い、魂の漂う空間が出現する。SPACは、体で表現する人（ムーバー）とセリフを語る人（スピーカー）を、別々の役者が演じる、二人1役という形をとる。人ならぬ者を表すのに相応しい表現方法だ。そして、役者たちは入れ替わり立ち替わり、舞台前面に設けられた演奏スペースに降り、様々な打楽器を演奏し、セリフと絡み合うように音楽が生まれていく。

物語が主題とする時間軸の長さや、空間のスケールに違いはあれど、どちらも「立ち止まって、死者と対話することによって、今を考える」という作品だ。「人は唄うために生きているのだ」と、アフタートークで永山は言う。かつて生きていた人のことを想い、その上に今の私たちのささやかな日常があることの奇跡を寿ぎ、未来を見つめる。演劇はそんな役割を果たしているのだと思うた。



「家、ついて行ってイイですか」事件

萩原 俊郎

(新日本海新聞社 東京支社長)

前号からの続きー。東京で女ひとりジャズを生業としてきた女房と再婚し、倉吉の家に迎えた途端、入れ替わるように東京へ単身赴任することになった私。ところが人生まさに「禍福は糾（あざな）える縄の如し」

上京して間もなく、横浜に住む娘に子どもが産まれた。いわゆる「初孫」だ。東京に赴任しなければ、遠い横浜に住む孫の顔なんて滅多に拝めなかっただろう。しかも通勤に使っている地下鉄・半蔵門線に乗れば、渋谷からそのまま東急田園都市線につながり、乗り換えなしで横浜の孫の近くまで運んでくれる。楽しい哉、人生！

ちなみに半蔵門線（押上―渋谷）は東京メトロの全路線中、最も短いが（十六・八キロ）、田園都市線、さらに反対側の押上からは埼玉に向かう東武スカイツリーラインにも直通でつながり、その総延長は百キロ近く、東京メトロでも最長路線に化けてしまうのだ。これがのちのち「悲劇」につながることになる…。

東京に来て早々、ここは「カネとヒマ」があれば、いくらでも楽しい街だと気づいた。ということは逆に、この二つがなければ、平凡なルーティンワークの日々となる。私は以前よりテレビをよく観るようになった。

お気に入りには、終電に乗り遅れた人（たいてい酔っ払い）に声をかけるテレビ東京の『タクシー代払いますから、家、ついて行ってイイですか』という番組。家に着くや冷蔵庫の中までのぞいて回り、やがてビートルズの「レット・イット・ビー」のイントロが流れ始めると、深夜、家の主はポツリポツリ自分の数奇な境遇や運命を語り始める…それだけの番組なのだが、「平凡な暮らしに隠された壮絶な人生」に毎回うならされる。

閑話休題。ある夜、日々かわいさを増す孫娘を肴に、横浜で元明大ラグビー部のムコ殿と大酒を飲んだ。「田園都市線さえ乗れば、大丈夫」。いい気分帰路に。乗ったのは終電だった。こういう場合、席には絶対座ってはならないのが大阪勤務時代、数々の痛い思い出から学んだ教訓だったが、少し酔い過ぎていた。

シートに深々、気持ちよく電車で揺られていると、車内アナウンスから聞きなれない駅名が。「越谷、越谷…」そうなのである。私は神奈川県から東京都を素通りし、なんと埼玉県の越谷市まで乗り過ごしてしまったのだ。

慌てて下車したが、後のまつり。「はて、どうしよう」。冬も近い。目の前は凍てつくような夜の駅前。

「たた一万円よ、兄さんどう?」。暗闇から怪しげな日本語で近づいて来る女たち。「ちよつと越谷、ヤバそうだな」。やむなく駅のタクシー乗り場へ。だが、もとよりタクシー代などない。「こんな時、あの番組が声をかけるんだろな」。そう思った瞬間だった。「あの、タクシー代払いますので:」。振り向くと、三〇代のポツチャリした女性ディレクターがハンデイクメラを手に笑顔で立っていた。

◇ ◇ ◇
デジャヴというか、私には時たま次の展開が恐ろしいほど当たることがある。さて、タクシーに乗せてもらうべきか:。待てよ、この番組、ケーブルTVで鳥取や倉吉でも流れているんだっけ。ビートルズをBGMに「私の人生の来し方行く末」なんて赤裸々に語った日には、「もう東京から帰って来い」などと、えらい騒ぎにならないか。

「すいません。自力で帰ります:」。迷ったあげく、断った。やがて娘から「ナビで駅近くにネットカフェを見つけたから、そこで寝るように」というありがたい地図付きメールが来て、その晩は「ネットカフェ泊の初体験」というおまけ付きながら、事なきを得た。

後日、自分が出るかも知れなかった「越谷駅編」を観た。

神田のコスプレ・キャバクラで働く若い女性。幼い頃、誤ってシャボン玉の液を飲み込んで原因不明の言語消失。ところがコスプレをしたら不思議にも言葉が少しずつ戻り始め、完治した今は越谷に自分のコスプレ・キャバクラを持つのが夢:うーむ、期待にたがわぬ波乱万丈の人生。

「幸福な家庭はどれも似たものだが、不幸な家庭はいずれもそれぞれに不幸なものである」。トルストイもそう言っている。誰もが、平凡な日々の中で人に言えない「波乱のストーリー」を一つは持っている。言い換えれば「真に平凡な人間」など、この世にはいない。そこに着目し、あきれるほどの低予算（タクシー代）で人気番組を作り上げたテレ東にはまったく脱帽する。

さらに後日談。この話を飲み会ですると、決まって「出演すれば人生変わったかも。もつたいない」「なんで断ったんですか。次は絶対出るべき!」別に悪いことをしたわけでもないのに、さんざん叱られる(笑)。

そうか、分かった、皆さんの期待(どんな期待なんだ?)にこたえるべく、いつでも取材のタクシーに乗れるように下宿をピカピカに磨いて「その日」を待っている。

それな

ワクサカソウへイ

(文筆業)

ただ、生物学的に「ハゲタカ」はいないと知ってもなお、ハゲワシのことをストレートに「ハゲワシ」と呼ぶ気にはなれない。なんというか、それではそこにある風景が満たされない思いがするのだ。そしてやはり「ハゲタカ」という名前こそが、ハゲワシのシーンを見事に満たしている気がしてならない。最近の言葉でいうところの「それな」ってやつである。

小学生の頃、同級の女子たちが髪型をポニーテールにする際に使用しているドーナツ状のリボンを「シユシユ」と呼ぶのだと知った。しかし、なんだか腑に落ちなかった。変な言い方になるが、シユシユは自分の中で全然「シユシユ」っぽくなかったのである。そんなある日、クラスメイトの矢島君が女子たちのシユシユを指して「頭バンティ」と表現した。たしかに。シユシユの生地的光沢や、くしゅつとした感じは、実にバンティ的である。

「ハゲタカ→ハゲワシの俗称」
戸惑わずにはいられない文言である。ハゲタカは、ハゲワシの俗称……？

そう、かなり多くの人が誤解をしているのだが、実はこの世に「ハゲタカ」という名の生物は存在しない。頭の毛が薄い猛禽類、あれはすべてハゲワシなのだ。「本当はハゲタカなんていなかったんだ……」とミステリアスな気分させられる、衝撃の真実である。

「頭バンティだー」「そうだ、あれは頭バンティだー」
男子たちは、にわかに色めき立った。いままでぼんやりしていたシユシユの風景が、「頭バンティ」という名前を与えられたことで、「それな」となり、クリアな実体として浮かび上がってきたのである。いまでもシユシユをしている人を見かけるたび、私は心の中で「頭バンティだ……」とつぶやく。

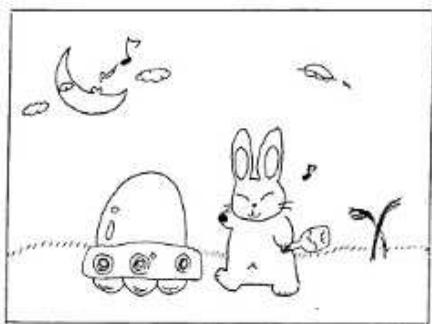
ふさわしい名前が与えられて、初めて風景が満たされ

る、ということとは確かにある。

そしてこれは個人的な定点観測による雑感だが、「名づけられていないものに名前をつけて、客の心象風景を満たす」ことに長けている作家や芸人が、最近やけに台頭してきているように思う。受け手にいかに「それな」と思わせることができるか、それが現在のキーワードになってきているっぽいのだ。外の世界には、一生かかっても消費尽くせないほどの情報や思考が満ち満ちている現代。我々はすでに外界の風景を消化することを諦め、内側の風景を満たすことを嗜みはじめたのかもしれない。かつて「未来」は窓の外の景色に求められていたが、これからは私たちの心の動きに「未来」の景色が託されるようになった、ということなのだろう。

もうすぐ平成が終わるこのタイミングでだからこそ言えることなのだが、「平成」って、なかなか「それな」があるネーミングであったように思う。まだ都市部にも野良犬がうろついている、現実世界と『ちびまるこちゃん』の食卓景色に乖離がなくて、したら突然にオウムが地下鉄にサリンをまいて、ポケベルが出てきたと思ったら携帯電話があつという間に普及して、モーニング娘がウオウウオウ声を上げたと思ったら、ネットが光速で世界と世界を繋げ始め、あげくの果てにはAIが登場し、気づけば野良犬の姿が消えていたこの約三十年間は、節

操などまるでなく、どこを切っても殺伐していて、「平」でも「成」でもなかったわけだが、なんだか実に「ヘイセイ」ではあつたよな、と思うのだ。平成は「平成」の名によって、風景を満たしていたということなのだろう。本当は実体などないのに、名前によって風景を顕している。という点において、「平成」は「ハゲタカ」によく似



環ヤポネシア (多層構造の街) 香港編②

芝野 浩貴

(地球探検家)

「尖沙咀」香港大学の中環

急峻な山地が多く占め(陸地の6割が山)平地がわずかしかない香港の不動産は世界一高い。

一九七二年香港島と九龍半島を結ぶ海底トンネル開通したので、宿のある九龍半島最南端の尖沙咀 Tsim Sha Tsui (ツィムシャツイ)から香港島までは MTR(地下鉄)で移動できる。私の街歩きは商店街や屋台があれば立ち寄るが、本からは離れないので図書館や書店があればアクセスすることが多い。香港島の西側にある香港大学(UIC)へ。一八九七年開学、一九二〇年には女子教育開始、一九七〇年リークアンユが博士号授与。大学書店に寄ってみた。衛生面に苦しんだ香港だからなのかマイクロプラスチック撲滅のハウツーギブアッププラスチックの本が店頭に飾ってあった。あと目立ったのは村上春樹とユヴァル・ノア・ハラリの本。図書館に入ろうと二度試みたが、IDカードのない大学関係者でない人は入館禁止でいずれも係員に止められた。丘陵にあるので、隣の校舎に移動するのも一苦労である。そのまま丘

陵の中腹を道路(Bonham road)を東へに沿って歩くが、曲がりくねった坂道で車がすぐに傷みそう。碁盤目の平地でなく低い丘陵にビルが林のように密集して乱立。二階建てバスが低く見える海岸沿いの道がたまに見えるが、函館や都内に勝る坂の街である。目にする建物のレンガは当然イギリス式である。(フランス式は同じ行に長短のレンガを交互に並べ、イギリス式は長いレンガの行と短いレンガの行を交互に縦に重ねる。イギリス式の方が耐性はある)香港は政府というより個人や中間団体が町を作ってきた。学校の近くに教会が目立つ。キリスト教人口は1割だが、教育・医療・福祉の分野では大きな影響力を持つ。公立学校もキリスト教系が多いのはイギリス領だったことが大きな理由だ。江ノ島のエスカレーターではない世界一長いセントラルミッドレベルエスカレーターにぶつかつたので、下の平地までエスカレーターに逆行して下る。一九九三年開通。1日4万人利用。800m 20分。10・20までは上から下、24時まで下から上、高さによって景観が変わる。海岸寄りに超高層ビル、庶民の市場や屋台、急勾配の山々にアパート群、高くなると高級住宅街。メキシコやブラジルでは上に行くほど貧困層となるが、香港ではピークになるほど、富裕欧米人居住区となる。セントラル(中環)は元はビクトリアと言った。水深が深く貨物の荷揚げがやりやすく港として発展。セント・ジョーンズ教会(香港現存最古一八四九年)の中を見学後、ピークトラムでヴィク

トリアピックに行こうと山岳駅まで行ったが、2時間の行列待ちだったので、港に引き返しFCの見晴らしのいいところで夜景を見て、スターフェリー(38円、8分)で香港島から九龍半島へ戻る。

「九龍城く旺角く油麻地」

九龍駅のフェスティバルウォーク(シヨッピングセンター)内では日本映画の「カメラを止めるな」と「コードブルー」が上映していた。日曜でスケートリンクには子供達がたくさん。香港の道路は信号は少ないが、ルックライト(望右とルックレフト(望左)の文字が至る所の道路に書いてある。下を見て、後は常に鳴っている音で渡るべきか判断。事故は自己責任で。九龍仔公園を横切り九龍城公園まで歩く。公園内は雨傘を屋根にテントを張つてる家族多数。園内の資料館にて学習。九龍城地域はかつては香木や塩の産地であった(香港という地名も香木を出荷する港の略宋の時に軍事要塞が外敵防衛を目的にこの地に作られた。南京条約後に清朝はイギリス軍を監視するために九龍城を作ったが日本統治時代にKAI TAK 空港建設のためウォールは日本軍に壊された。戦後大陸から押し寄せた人の集合住宅となり「悪の巣窟」と呼ばれた。平地が少ない香港ではこの地に集まり人口密度も高く、例えると東京ドームの半分の敷地に5万人の観客が立っているというイメージ。walled cityの rooftops は昼は子供の遊び場、夜はドラッグの温床だった。衛生面も悪く、一九

九三年までに香港政府の指導により住民は全員退去。建築学的にはファベラや中野ブロードウェイや軍艦島などと比較される。公園に垂直に南北に通る10本の通りを全て歩く。市場を囲む路地裏のある古い物産店とイオンも入っているシヨッピングセンターが対照的である。この辺はタイ人が多い。海岸沿いを西へと歩けば旺角(モンコック)に着く。モンコックとは繁栄の地点という意味。一九二四年には村と農地はなくなった。香港の街は通りの特徴が名前になることが多い。花墟道(フラワーストリー)は200m 花屋が続く。通菜街は金魚・熱帯魚店が軒を連ねる。水槽の中のグズも豊富で、多彩な珊瑚礁を売っている。犬、亀などのペットショップに紛れてたまにコショップもある。かつては金魚店だったのだろう。山口柳井の金魚提灯やかつての日暮里の金魚街と比較想起。女人街では女性物の衣類や雑貨をメインに販売。(香港の男女比は女54・男46で女性が60万人多い)屋台も多く、パイナップルパンとメキシコパンをかじりながら湯麻地経由で、ネイサンロードを南下して、上海通りの夜市を覗いて尖沙咀。ネイサンロードは、九龍を南北に貫く38キロの幹線道路である。昼屋や銭湯はないが、平川克美的商店街の要素は何か、中沢新一の香港アーサダイバーはどう記述されるか、タルマーリの菌本位制はどこで展開されるか、いろいろ妄想してみた。

サクラサクラ、ヤヨイノソラウ

△フカミ ヒロミ

▽ライング・ブックマン

担任が前の日に描いてくれたのだろう。

最近、偶然に、その担任の声を聞く機会があった。

電話越しではあったが、もうかれこれ九十近いお歳の筈ながら、張りのある矍鑠とした声であった。

ちなみに、隣の席に座った女の子のカーディガンがピンクだったことも、名前もすっかり憶えている。

その子とは、七年後に不思議な形で再会することになるが、それはまた別の話。

三つ目の桜は、小学三年生の時。

当時、住んでいた奥出雲の山間の町は、川沿いに二キロも続く桜並木が有名で、後に日本の桜百選に選ばれたくらいだが、花時はそれは見事なピンクのトンネルになる。

通学は、山をひとつ越えて行くのだが、その頂上がまた花の名所で、町内を一望できるロケーションでもあった。ここで初めてタコ焼きというものを食べた。想像していた蛸の丸焼きとは似ても似つかぬ形状であったが、値段は忘れもしない、三個一〇円で、経木の舟に盛ってあった。

二つ目の桜は、小学校の入学式。
校庭の桜が満開だった。(かくあれかし、という後付けの記憶かも)

教室に入ると、黒板一杯に描かれた桜の木の絵があった。

四つ目の桜は、高校の時。

通学路の川土手が桜並木だった。如何せん、行き帰り

にそれを愛でるような風流も余裕も持ち合わせてはいなかったようだ。

ただ、古典の授業で教わった桜は忘れていない。

み吉野の高嶺の桜散りにけり

嵐も白き春のあけぼの

新古今に採られた後鳥羽院の歌である。

教師が「これは世界最初の象徴詩である」と語ったのが印象的であった。

元々、最勝四天王院の障子絵のために詠まれた歌である。日本全国から四十六の名所を選び、絵に描かせ、歌を添えるという趣向であった。

当代一流の歌人十人に詠進させ、秀句を選んだ。

差配は全て藤原定家が司ったが、最後の最後で後鳥羽院がゴリ押しし、自歌を割り込ませた、らしい。

そのひとつが「嵐も白き」である。

余程自信があったのだろうし、確かにそれだけの風格ある名歌であるが、こうなつてくると、幻想華麗な象徴詩もいささか生臭い。

さらにキナ臭い話もあって、そもそもこの寺院の勧請は、源氏調伏の呪いのためであったと言われている。竣

工の暁は、功労者の定家さえも入れてもらえず、夜毎、高僧を招いて呪言が唱えられた、と。

その証拠に、三代將軍源実朝が暗殺されるや、惜しげもなくこの広大な寺院は取り壊されてしまうのである。

碌に成果を見ることもできなかった定家にしてみれば、「見渡せば花も紅葉もなかりけり」の心境であったかも知れぬ。

桜の名画は数々あり、土牛の「醍醐」や大観の「夜桜」など捨てがたいが、筆者がもつとも桜の美を感じるのは、伊藤彦造の「初陣」という絵である。

桜が散り頻る中、美しく鎧兜に着飾った二八の頃の若武者が、馬上にあつて、扇で花びらを受けている図である。馬の蹄にかけるのを惜しむが如き思い入れ。

これほどに、桜の美しさと移ろいやすさを描き、匂いやかで色彩を感じさせる絵があるだろうか。

ペン一色のモノクロ画なのである。

見わたせば、青やなぎ、

花桜、こきませで、

みやこには、道もせに、

春の錦をぞ。

(柴田清熙)

2月の日記

坪井日記 ⑭

齊藤仁昭

(長崎書店)

2月某日

バンドのギタリスト、佐藤君から「急性喉頭蓋炎にかかったので今から入院します。」とメールが届いた。聞いたことのない病名だったし、真一(佐藤君)が心配だったので久しぶりに直ぐにググった。「急性喉頭蓋炎とは、声帯の上方にある喉頭蓋に急性炎症をきたす疾患です。進行すると気道閉塞をきたし、最悪の場合は死に至ります。迅速な治療を必要とする救急疾患です。」とある(メデイカルノートのサイトより)。えらいこっちゃ。明後日は来月のライブのリハが入っていたのだがそんなことよりゆっくり治して下さいと返信しておいた。その後返信がなく、気管切開しなければいけないほど症状が進んでいたら大変だなと考え込んでしまった。真一は中学2年の頃からもう四半世紀以上遊び続けているのもう家族みたいなものだ。

翌日別のメンバーから「順天堂大学付属の病院に入院しているらしい。」と連絡を受ける。明日はリハで上京するので、「見舞

いに行つてみる。」と返信。(こういうときにメンバーで待ち合わせしてお見舞いに行つたりしない関係が、バンドが長続きしている理由なのかな。)

半月ぶりくらいに東京へ。順天堂大学医学部付属順天堂医院へ向かうためお茶の水の駅で降りる。検査等があれば避けるために真一にメールを試みたら、「練馬高野台の順天堂医院にいるよ。」と返事が。一か所だけだと思つてたよ。お茶の水から池袋へ向かい、西武線で練馬高野台へ。病院の前で今度は電話を試みたら声を出すのが億劫そうだったので、自分の気遣いのなさに悲しくなった。受付を済ませて560号室へ。顔がすつきり痩せてやがる。抗生剤だけで済んだようだが最低でも1週間は入院しなければならぬとのこと。そしてとにかく暇らしい。アマゾンプライムの「高い城の男」を勧めておいた。デカビタをおごつて少し話してから練習員。6時間スタジオに入ったあと食事へ。必然的に身体と年齢の話になる。こういう話はどう少し年取ってからだと思つていたけれど、もうすつきり若さの消えてしまった我々であった。

2月某日

こどもがつかまり立ちをするようになった。つま先でぶるぶるしながら立っている。うっかりすると転びそうなので両脇を抱えて床に座らせた。座らせたときに思った。転ぶと泣いたり怪

我したりして自分が面倒だから俺は床に彼を置いたのではないか。こどもは立っていたいのかも知れないにも関わらず、自分の面倒くささから予防的に彼の行動を妨げた。これってなんだか警察的なんじゃないか…と悩んだ。転ぶ直前まで見守るべきだろうと思ひ直し次から座らせるのをやめたら案の定転んだが頭を床にぶつける前に支えることはできた。しばらくこのスタイルでいこう。

足をのばしてGO

流れる様な夜通り抜けて
寝たふりのロンリネス
触らぬように遠回りして

気分はハイカローからまって
意味などないだろう 黙ってて
ただ僕ら

浴びる様な愛を乞うだけ
浴びる様な愛を乞うだけ

湿り気残ってる

小道を跳んで跳ねて歩く

あの子は笑ってる

靴音遠く高く響く

灯りをともしてよその声で
日々を照らしてよその声で
ハレルヤ

浴びる様な愛を乞うだけ
浴びる様な愛を乞うだけ

知るはずも無いだろう

漂う様な毎日の事
わかる訳無いだろう
全てはもう向こう側の事

灯りをともしてよその声で
日々を照らしてよその声で
ただ僕ら

浴びる様な愛を乞うだけ
浴びる様な愛を乞うだけ

戸國 航

(鳥取西高二年生)

の新聞部であったために、氏の縁深いものとして展示されていたのだった。

今では西校新聞は廃刊の憂き目にあるっているが、昔は非常に精力的に制作されたようで、どの月の新聞も哲学から文藝、学校教育の反証と非常に広範囲に情報をとらえており、また大変重厚な内容である。

私は休日にはよく鳥取大学図書館に行く。そこで新聞と新書・専門書を読むのをいつも自分に課している。大学図書館では一階のロビーに郷土資料の常設展示があるのだが数か月前から、鳥取のタウン誌であった『スペース』の展示がされている。つい最近まで気にも留めなかったが、この前ふと気になった。そのため一つ一つの展示物を注意深く見てみると、そのコーナーには『スペース』の関連資料として定有堂の開業直後の資料や写真も展示されていた。なるほど、定有とはヘーゲル哲学からとってきた言葉なのか、知らない私はまだまだ自分は学が足りないなどあるとか、この頃から定有堂では月刊誌を作つて発行していたのだな、と思いを巡らせていると一つ大変興味深いものがあつた。それは鳥取西校新聞集という本で、それはスペースの制作者である徳永氏が鳥取西校

中にはフーコーの哲学書の書評をやっている月もあり、私はただ驚くしかなかった。その新聞集に掲示されている新聞の発行年は大体昭和三十年ごろから五十年であつた。つまり六十年安保や七十年共闘といった学生運動の興隆期と重なっている。そのためその影響も大いにあるであろう。しかし、どうも同じ高校生が書いたとは思えぬ内容であつた。社会の動乱を敏感に察知し、行動していた高校生は大変大人びていたのだなと全新聞を読み終えた私は、暫し新聞の執筆者たちの事を想起し、彼らに羨望の念を持った。

その日のことを自分の懇意の教員に話すと、やはり彼らは時節柄の事もあつて自己のありようについて社会関係の中から模索していたのだらう、しかし今ではそのきつ

本で、それはスペースの制作者である徳永氏が鳥取西校

かけも環境もなかなかないだろうから彼らのようになるには困難だ、とはつきり述べた。

その直後はなるほど、その通りだと短絡的に片づけたが、なんだか事あるごとに以前の新聞のことが気になって仕方がない。そのうち私が西校新聞を復活させてみたいと思うようになった。しかし、今一から新聞を作るのは困難であるし、協力者も皆無であるためあきらめるしかない。だが、彼らのように社会関係のなから自分の有り様を照射し深く考えることは今の時代であつても無理からぬことはないであろう。権力的な構造や差別的な構造の中にある自己を問うことは可能であるはずである。しかしそのような自分を認識するには、やはり多くの事象を構造主義的に認識できるように多くの概念を学んでいかねばならぬ。私はまだ若く、ものを知らぬから、もっと多くのことを鋭敏に学んでいこうと思う。

定有堂教室「読む会」 毎月一回 次回 三月二六日(火曜日)

テキスト 吉見俊哉『トランプのアメリカに住む』

(岩波新書、2018)

土筆



五百川 知子

アシル

放課後の広きグラウンド春浅し

をちこちに綺羅の映るふ庭雪解

新しき命を信じ野火見つめ

迷彩を施されたる土筆かな

春雷やもう少し寝ていたき頃

インドからの二人



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

インドの俳優二人による舞台を京都で観る機会があった。一人はチャンドラ、不可触民の男性を、もう一人はルデイ、自分のカーストも不可触民の存在も知らずに生きてきた男性を演じる。現実の俳優二人と舞台上の二人の名前が同じなので、重なり合うような内容だった。かつてインドのカースト制度を転用して犯罪部族と指定されたコミュニティが作られ、今日まで続く差別と偏見の問題性が二人の対話を通して私たちに問いかけられる45分の濃密な時間だった。

デリー出身のルデイは英語を話し、田舎の村出身のチャンドラは自分たちの方言しか話せない。彼にとつて英語は理解できてても自分の考えや気持ちを表すには使えない言語である。チャンドラの話をもルデイが英語に訳してく

れる。

ルデイの英語も訛りがあつたり、なかつたりと話す内容によつて使い分けているような気がした。実際の俳優さんも舞台上での役柄として演じながらも、自身のことに近いようなので彼らの生の話を聞かせてもらったことになる。

チャンドラが子供の頃からどのように差別され、超えてはならない境界と向き合ってきたか、ここから先の地区へは足を踏み入れてはいけない、労働後に水を勧められても飲めない、我慢と忍耐で生きてきたことをルデイに話す。そのような世界を知らないルデイは興味深く、ある意味では新鮮さを持つて聞き入りながら、私たちにチャンドラの言葉を訳してくれる。チャンドラは彼の差別されている村と彼らが入れない隣村との境界を床に絵を描いて示してくれる。女の子に恋しても、その思いだけで次には進めない。こういう場面は彼の表情やジェスチャーで、インドの一方言が何となくわかったような気になるのだから不思議だ。

ある場面でルデイがチャンドラになりきつて、「僕が」という主語で訳し始めた時に、チャンドラは、「君は僕ではないのだから、その主語は使えない」と言った。決

してチャンドラの立場やその気持ちが変わらないルディに「僕」を主語として語ってほしくない、「チャンドラは」と言つて訳してほしいのだ。ここで思い出したことがある。

ロシアから帰国後に通訳の仕事をしていた時期があった。ある時、初めて講演を訳すことになった。チェチェンからの女性ジャーナリストだった。ウラジオストクに住んでいた頃、テレビをつけるといつもチェチェンからのニュースが流れていた。極東からは遠く、えらいことになっているなと思いつながら、毎日ロシア側からの報道を見させられると日常として慣れてくるし、周りのロシア人たちもやはりチェチェン嫌いだつた。でも息子さんがロシアの軍人としてチェチェンにいる人の話を聞くとき心配にもなるし、紹介された数人のチェチェン人との会食で話が弾むとチェチェン民族に好感を持つてロシアが悪いよなーとなる。

ジャーナリストの女性は18歳の息子さんを伴つて来日。私の目には辛酸を嘗めてきた男、彼女の夫のような存在として映つた。戦争は彼から青春時代を奪い、大人にしてしまったようだ。ラマダン期であつたので日中は何も口にしなかつた。人権保護団体主催の講演会ではジェノ

サイドに聴衆の関心が向けられた。

終了後、聴衆の一人から「気持ち伝わってきたいい通訳でした」との言葉をいただいた。後にも先にもこのように言われたことはない。戦争の体験はしていないし、想像力も乏しい中で、どうやって訳すのか。講演会のためだけに通訳の仕事でその場に行つたのであれば、準備された原稿の表面だけを翻訳して伝えただろう。しかし、彼らと二日間を共に行動したおかげで、彼らのことを少しでも理解することができるようになつたこと、またそのことで実際に講演の場では、もう用意してきた原稿からは離れて、彼女は自分のその時の言葉と感情を語り出した。私も自然と彼女に自分を重ねることが一時的にでもできていたのかもしれない。チェチェン人になつて「私は……………」と訳してははずだ。

インドから来られた二人による公演からロシアへ飛んで、戻つてくるのは鳥取です。チャンドラとルディの会話は耳からは英語とインドの方言が音として入ってくる。それを字幕で追いつながら聞いていた。「鳥の劇場」での字幕表示がいかに見やすいか、舞台での演技と同時に字幕を疲れることなく見ることができるとあるが、それを改めて思った。

鳥取あれこれ その三十一

内田克彦

(地域研究家)

碧川かたの養父堀正について、堀の曾孫の堀啓次郎氏による著作『元九郎奔る 幕末鳥取藩士の手記』に、「元九郎の手記」が載せられており、次の記述がある。

「一八九五（明治二十八）年」九月米子耕作ニ従ハン
トスはヨリ前テ二十七年拾一月東京ニ於テ池田家ノ設立
ニカ、ル久松閣附属館幹事ヲ囑託セラレシ事アリ故ヲ以
テ再ビ其任ニ就カン事ヲ懇懇セラル（略）敢テ其命ヲ受
ケ以テ現今ニ至ル

『新修鳥取市史第五卷』によれば、鳥取県人の進学を奨励しようとする組織は、一八八二（明治一五）年に東京に作られた「成材社」が最初のものであり、事務所を「東京向島寺島村千二百三十七番地池田家邸内」に置いた。一八八五（明治一八）年九月に久松閣に改組し、貸費生に選ばれた生徒は「東京神田中猿樂町廿二番地久松閣付属館」に下宿させた。この付属館に幹事を置いて、久松閣生徒の監

督を行わせた、とある。

因みに、鈴木英幸著「岸本辰雄と郷土」（『明治大学史紀要』第十一号）には、一八八五年一〇月二八日付けの『朝野新聞』の広告欄に、久松閣を運営するに当たり、必要となる役員選挙のための選挙管理委員として、「清水仲、伴熙、遠藤増蔵、岸本辰雄、奥田義人、河崎真胤、神戸信義、佐善元立」の名が載る、と書かれている。

なお、「久松閣附属館」は、一八九一（明治二四）年には小石川区表町に移転、一八九九（明治三二）年鳥取県勸学会が設立され、翌年「久松学舎」と改称し、鳥取県出身学生の寄宿舎になった。

かたは、離婚後長男の操（後の露風）を龍野の義父の元に残し次男の勉を連れて鳥取に帰ったが、看護婦になるため上京し、勉を堀夫妻に預けて、一八九五（明治二八）年一月に帝国大学附属看病法講習科に入学した。

堀がいつまで舎監に就いていたのか不明（一九一五年七月、行年七七歳で死去）だが、伊福部隆彦が、生田長江から聞いた話として、「先生が帝大を出て文芸批評家として売出しの頃であるから多分明治四十年頃のこと」として、「舎監をしていた旧藩士の某氏（失名）」が生田の所を訪ねたときのことを、次のように書いている。

「実は私の甥に、とんでもない自称天才がいて、生意気で（略）お前は誰の言うことなら訊くといふと、生田長江の言うことなら訊いてもいいと言うのですが、すみませんが一つ面倒を見て下さいませんか」

この舎監とは恐らく堀正のことであり、「甥」というのは伊福部の記憶違いだろう。一九〇七（明治四〇）年、生田は露風を推薦して、詩を『芸苑』に載せている。さらに伊福部は、「当時の露風は実に颯爽として肩で風をきつて歩いて」いた、と描写している。

当時、鳥取県出身者が東京の学校に進学したときは、この久松閣附属館（のち久松学舎）や学校の寮、伝手を頼って見つけた下宿などに住んだものと考えられる。

永井幸次の自伝『来し方八十年』には、久松閣について次に掲げる記述がある。

「一八九二（明治二五）年九月一日」「永井」「伯父の家が神田にありますから、そこから通うことにしています。」

「田村虎蔵」「僕は旧藩主の建てられた久松閣に入りました。」

ここで田村君と一緒に出て来た林甚蔵「後、重浩と改

名」君を紹介された。この「東京音楽」学校に鳥取から同時に三人志願したのはこれが初めてで、「村岡範為馳」校長の帰省が学校の宣伝になった（略）

この「一八九三年」秋、下宿していた伯父の家が神戸に引き上げることになったので、彼「永井のこと」は久松閣の寮に入れてもらうことにし、林君の部屋に同居することになった。

一八九五（明治二八）年には、岡野貞一が上京してくる。岡野は永井の弟脩造の友達で、『来し方八十年』には「音楽学校の三年生であった時に呼び出して同校に入学させた」とあり、

吉田恒三、高橋二三四、米野鹿之助、岡野貞一と彼「永井のこと」との五人で、下谷区車坂町の或る横町に一軒借りて自炊生活をしていた

県出身者が住んだ久松閣附属館・久松学舎を巡る人間模様は興味深く、数多いと予想されるので、今後もし引き続き調べていきたい。

虚像ばかりのドビュッシー

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

序

先ず〇〇××…と云った主要作曲家の名前ヲ覚へ其ノ人物の伝記ヲ調べ、其の人は△△かういふ傾向の人だから云々と自分なりの人物像ヲ築いた上で重要作から聴いてゆく事こそ音楽の正しい鑑賞、王道だ…此は或る評論家の唱へる方法。

インチキな奴だなあ…チエツ！僕はかういふ常識・偏見こそがクラシック音楽の敷居を高く見せ誤つた先入観を植え付けるだと思ふ。

I

いったひ、ヴァグナーとドビュッシー（の風貌）はイメージで云ふと「悪人顔」である。二人共自信過剰のアイデアリストでアナキーな革新家だったけれど、「人間的に」悪い噂しか聞こへてこなひ。

曰く、他人の（然も弟子の）妻を寝取つた。曰く女性に冷たかつた。曰く、詐欺師みたひに言葉巧みに振る舞い借金を踏み倒して逃げた云々。

しかしさういふ、他人の言は大抵「良く知らなひ人」達が「面白可笑しく」調子良く「大声」で語つたのであつて、彼らの素顔はまうとつくに歴史の彼方に消へてゐる…。

II

僕は不勉強。此の二人の伝記を読んだ事も無いので、先程の評論家に云はせると「語る資格も」無い者と云へるだらう。

然も、特に後者に就ひては青年時代「大変苦手」として居たせひで余り良く識らなひ。大学の音楽史の講義でもドビュッシーのドの字が聞こへると高らかに軒を掻いて眠つて了ふ始末。

III

そんな訳で、三島と同じやうにドビュッシーを聴くやうに成つたのはちよつ過ぎてから…最初は「バーンスターの「海」やらさう云つた交響作品に「アレ？」と目から鱗の落ちる想ひ…それから色々な分野に、此の独創的な人物のユニークな美学を認るに至つた。

IV

さうして彼の音楽を少うしずつ聴きはしめる内、日本で「常識的に」貼られてゐるレットテルに？ばかり感じるやうになつた…。

V

先ず「印象主義の開拓者」：「ハア？」彼は果たして、印象主義を唱へたらうか？否、である。

ぜんたい、僕は音楽に「印象主義」は存在しない、さう思ふ、抑。

美術のやうに、或る特定の「技法」等をこさへさういふ理想ヲ追求したと云ふのなら解る。しかし、ワグネリアンから出発、マラルメのサロンに参加し象徴派の詩人達と交はり、東南アジアやロシアの音楽、中世の教会旋法、東洋の五音階等の影響を受け汎ロマンの主流から外れて行つた彼の音楽は、独自の方法に拠つてみて、其れは「印象主義的」では決して無い、

VI

そして「フランス音楽」の代名詞のやうに思はれてゐる、此の作家に「フランス的」なるものを余り感じない。

パリの雰囲気を漂はせるプーランク、フランス的なカトリシズムと感覚を聞かせるフォーレ等こそフランス的、ドビュッシーはどちらかと云ふとエキゾシズムの作家だらう！

VII

こんな風の一つ一つ見てゆくと、其処に日本でよく云はれて居るやうなステレオタイプなものでは無く彼の、独自の美学が鮮やかに映し出されて来る。

彼が、悪い人だったか？…僕は知らない、友人達に不誠実、女を泣かしたのか？實のところよく解らなひ。し

かし、今、古典と成りつつある、音楽にこそ訊きたひ。遺されてるのは唯スコア。其処に語られぬ、現在演奏を通してのみ語りかけられるものこそ本当のドビュッシーだから。

2019. 01. 29

【今回の一冊】「ドビュッシー音楽論集」反好事家八分音符氏（ムッシュ・クロツシユ・アンティディレタント）

〜平島正郎訳、岩波文庫刊

【今回の一枚】①C.ドビュッシー「海」3つの交響的素描「イベリア」「ピアノと管弦楽の為の幻想曲」Op.

ミュンシユ指揮フランス国立管弦楽団他

1962. 05. 08 live

② J.S. バッハ「ゴルトベルク変奏曲」BWV988 カール・

リヒター Cantb, 1969年4月8日 日生劇場 NHKによる実況放送録音 東京 Live

画. A. T



あきの素生

(くうねるめがね)



ほぼみかんで占められていたスーパーの果物売り場の一角に、いろんな柑橘類が並び始めた。はつきくで、ぼん、伊予柑、文旦、清見オレンジ、せとかななど。橙色や黄色の、丸くつやつやした柑橘が積み上げられているのを見ると、まだ寒さと暗さの残る季節の中でも、少し春めいた気持ちになる。

柑橘は好物だ。爽やかな酸味で、口の中がさっぱりする。豊富なビタミンC、低カロリーというイメージも好印象である。夜遅く、何か少し食べたい、というとき(お酒を飲んだ後で、喉が渴いていたらなおさら)、柑橘があるとうれしい。

柑橘といえば、小学校の修学旅行で山口県に行ったときの、バスガイドさんの話が記憶に残っている。山口のガードレールは橙色で、これは夏みかんの色なのだといいこと、みかんは昔、黄金色なる中身別々袋入り衛生果物と呼ばれていたこと。数ある修学旅行の思い出の中で、これを覚えていて理由はよくわ

からない。それだけみかんが好きだったということか。そういえば、中学を卒業するとき、部活の後輩からもらった寄せ書きに「先輩の黄色い手のひらが云々」と書かれるほど、冬になるとみかんをたくさん食べて、手のひらを黄色くしていたのだった。

みかんの花が見てみたい、という友人と一緒に、瀬戸内の島に行ったこともあった。みかんの花と聞くと、手遊び歌「みかんの花咲く丘」を思い出す。あの歌にあるような、青い海を背景に咲く白い花々を思い描いていたのだが、あいにくの天候で、曇天、灰色の海、冷たい小雨。花もあまり見えなかった。島の特産物である藻塩をまぶした「藻塩むすび」のおいしさが、私たちを慰めた。

柑橘と春を結びつけて考えられるようになったのは大人になつてからだ。まず、それぞれの違いがよくわかってなかった。これは伊予柑、これははつきく、と都度都度聞いてはいたが、違う種類のを一度に食べることはほほなく、次に食べるときには、前に食べたものの味や特徴を覚えていない。「みかん、オレンジ、グレープフルーツ以外のみかん」というジャンルでなんとなく一括りにしていた。また、夏みかんや甘夏という名前のものがあるし、温暖な地域で栽培されていること、太陽を思わせる色であることも手伝って、夏の果物のイメージすら持っていた。

数ある「みかん、オレンジ、グレープフルーツ以外のみかん」の中でも、とりわけ、はっさくが好きた。はっさくが好きたと気付いてから、柑橘の種類の別や、その旬がわかるようになった。皮が固くて、手で剥くと親指の付け根が痛くなる。じょうのうもいちいち剥かないといけないので、食べるまでに時間がかかるし面倒くさい。それでもやっぱり、はっさくを選ぶ。甘味と酸味と苦味のバランスが、私にはちょうどいい。粒がしっかりとっているのも魅力的だ。瑞々しいけれど、水っぽくない。じょうのうを取って去った果肉は、一粒一粒がつやめいて、凛々しく美しい。

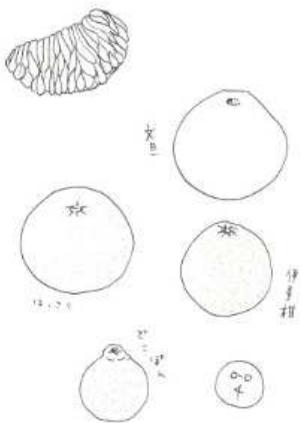
はっさく発祥の地は、広島県の因島だ。江戸末期、浄土寺というお寺の住職が、境内で偶然見つけたのだという。元々は因島に数多く存在した「ジャガタ」のひとつ。『因島柑橘史』によれば、「ジャガタ」とは「不明の柑橘果実」のことで、「雑柑」を意味しているのではないかと言われている。また、因島に雑柑の多い理由として、温暖な気候等の自然条件と、村上水軍の影響が挙げられている。外国との交易の中でもたらされたのか、遠征先から持ち帰ったのかはわからないが、海を渡ってはるばるやってきた様々な柑橘を、海賊衆やその家族が食べ、その種から芽が出て、木が育ち、咲いた花が、何十年、何百年と交配を繰り返して、「はっさく」となったのだと想像してみる。それが山の奥深くではなく、お寺の境内に生っていて、(おそらく)食いしん坊の住職さんの口に入ったことで、日の目を見たというのも、なんだ

かよい。

明るい日差し、海の気配。柑橘の持つ暖かさが、春待つ身をほころばせる。

参考文献：『因島柑橘史』岡野周蔵(著)

(http://island.geocities.jp/citrus_innoshima/)



イラスト・あきの素生

飛ぶはなし



ドラマメリア
(座敷わらし)

先日、ずいぶん久々に空を飛ぶ夢を見た。タイ旅行に行かれた知人の写真を見たからかもしれない。マハナコン・スカイウォーカー高さ三一四メートルの展望台にあるガラス張りの床は、まさに絶景。そこでポーズを取る写真はまるで空を飛んでいるようだった。(わたしは高所恐怖症なので、とてもあそこには上れないし上りたくもない) 以前実家にいた頃は繰り返し見たものだが、近頃とんと見なくなっていた。ああ大人になっちまったのだな……、と思っていたので、少し嬉しくなる。

しかし、成長して身の程を知ったからか、内容はなにやら現実的を通り越しても悲しいものだった。まず、あまりに低空すぎる。歩いている人の頭のあたり。そして、スピードがのろい。ゼイゼイ息を切らしながら目一杯飛んで、人間が走るスピードよりちよつと速いかな程

度。夢の中ぐらい、物理法則も何もかもすつ飛ばして、もうちよつと爽快に飛行してもいいんじゃないか。というよりこれ、はたして飛ぶメリットはあるのか……？と目覚めてから自分でも考えてしまった。

この話をしたところ、ある人にこう言われる。「懸命に努力して、人より少し上を少しだけ早く。それもアリかも」。……なんといい解釈！

スマートに何でもこなせる人に憧れる。けれど、残る人生で到底その域にたどりつかないこともわかっっていて、いつもさんざんジタバタしている。そのジタバタ加減含めて、自分らしい飛び方なのかもしれない。



・編集後記：

すつかり春。今年には本気の雪グッズの出番がありませんでした。数年前の記録的な大雪のときに購入した膝上まであるスノーパー長靴が、次に活躍するのはいつになるでしょう。

ドラマメリア(編集長)

二月、毎日新聞(2/14)とBEAMS「フエニカの鳥取」(民藝中心の鳥取案内)に定有堂書店のご紹介。「開風社 待賢ブックセンター」

(京都 大宮通) 店主は鳥居貴彦さん!! 今号登場。奈良敏行(発行人)